歴史を歩く⑯

『戦国時代の群像 ～第一話　伊作久逸の乱～』

今から約550年前、郷土もいよいよ戦国期を迎えようとしていた。この時期各地の武将は互いに緊迫した関係にあり、いつ、何がきっかけで戦乱になるか分からない状況にあった。

志布志城主新納忠続は島津家の命によって、長禄2年（1458年）に飫肥（現在の日南市）の守備を任され、北の伊東氏に備えていた。志布志には忠続の代わりに弟である是久が配置された。

東の守りを強化するため、島津本家十代目当主である島津立久は、文明2年（1470年）に志布志と飫肥の中間にある櫛間（串間）に伊作久逸を置いた。伊作久逸は島津立久の実の弟で、島津分家である伊作氏に養子となっていた人物である。

しかし新納忠続は久逸が櫛間に配置されたことによって、自身の治める志布志と飫肥を寸断されてしまう不都合があったため、とうとう文明16年（1484年）に島津本家十一代島津忠昌に対し久逸を移すことを願い出た。忠昌はこの申し出を受け入れ、伊作久逸を伊作へ帰るように命じたのである。

しかし、久逸はこの命令に従わず、直ちに兵を挙げて、飫肥の新納忠続を攻撃した。忠昌は、島津分家である都城領主北郷敏久、日向野々美谷城主樺山長久、串良の領主で島津忠昌の家老職でもあった平田兼宗、同じく家老職であった日置郡郡山領主村田経安、根占の禰寝忠清、高山の肝付兼連などに伊作久逸の討伐に当たらせた。この頃の大崎町では、肝付本家と袂を分かった肝付兼光が、高山を去って大崎の地に大崎城を築いていた。この大崎城の肝付一門も久逸討伐に加わっている。

ただ皮肉なことに、志布志城を任されていた新納是久は、兄に背いて久逸に味方した。実は久逸が櫛間に入城した際に、久逸の子の善久を養子に向かえ、自分の娘の常盤と結婚させていたのである。

久逸の反乱は、大隅・日向だけでなく、薩摩にも飛び火した。島津氏の抵抗勢力であった祁答院、北原、入来院、東郷、吉田、菱刈などの豪族が忠昌に背いて、兵を挙げ、さらには、帖佐にいた豊州島津家二代目の島津忠廉までが、中立の立場から突然忠昌に反旗を翻した。また日向の伊東祐国も反乱に乗じて、飫肥の地を奪おうと企み、久逸とともに飫肥攻撃を仕掛けてきた。一時久逸の連合軍は、忠昌の居城である鹿児島清水城にまで迫るほどまで勢いを増した。

しかし、この大乱は翌年の文明17年（1485年）に終息を迎える。島津忠廉は薩州島津家の島津国久の説得によって兵を収め、忠昌に背いていた豪族も帰順したのである。そして、忠昌は自ら兵を飫肥に進め、伊作・伊東の連合軍を撃破するに至った。新納是久と伊東祐国はこの時、討ち死にした。そして久逸は櫛間に逃れた後、降伏し、程なく新納是久の養子となっていた息子の善久らとともに伊作へ帰った。

文明18年（1486年）に島津忠昌は戦後の整理を行うため、豪族の所領の配置換えを行った。新納忠続の拠点であった飫肥には島津忠廉が配置され、以後櫛間を含め豊州島津家が領するところとなる。新納忠続は再び志布志を任され、飫肥の代償地として末吉、財部と救仁郷が与えられた。よって大崎は高山肝付家の領地を除いて、新納氏の所領となる。この時大崎城も新納氏のものとなった。

大崎城を築造した肝付兼光は、文明15年（1483年）にすでに亡くなっていたが、後を継いだ兼固には、島津忠昌より新たに姶良郡溝辺の領地を与えられた。こうして肝付兼光に始まるもう一つの肝付家は、本家とは違う運命を辿ることとなる。

明応3年（1494年）に久逸の子の善久は下男によって殺され、久逸自身も明応9年（1500年）に薩州島津家の内紛に巻き込まれ、薩州家の島津忠興に討たれた。伊作家は度重なる不運に見舞われたのである。

しかし、伊作善久と，新納是久の娘である常盤との間に生まれた子どもが，後に島津忠良（＝日新斎）として島津氏発展の基礎を築き上げることとなる。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】

▲伊作久逸の墓（日置市）
サムライワールド
『サムライたちの墓－九州編』より